イノシチ
宮本 小鳩

# 物語の前のお話

　おだやかな、どこまでも続いていそうな、とある海のとある場所に、その辺りに点在する島々の中でも、わりと大きめの島がありました。
　「イモガラ島」と呼ばれるこの島には、イノシシたちが愉快に暮らしていました。
　この島全体の形は、北側が二つの角のような岬と、その間の凹んだ部分から成り、南側は下ぶくれのようにおおらかにふくらんだ海岸線を描き、まるでひとつの水ガメのような形をしていました。
北側の地区は、南側に比べるとやや都会的で（あくまでやや、です）、流行の先端を行く町並みや、研究所などが立ち並んでいました。
　島のやや中央には大きな湖と、それを見下ろすようにそびえるイモガラ山があり、そこを境にした南側の地区は、農業を主体にした世帯の多い、のんびりとした田舎の村でした。
　島の名産品は里芋とキノコ、そしてイモガラ酒など、美味しい食べ物ばかりでした。
　イモガラ島から北西へ一時間くらい船を走らせた所には、ワイル島という、小さい島がありました。
　ワイル島は、イモガラ島では伝説の島と呼ばれ、古くからの王族による支配が続いている保守的なお国柄でした。ワイル島の住民でさえも、王室の者たちの顔を直に見たことがないと言われるほど、王族の一族は崇め奉られる存在となっていました。そのような島ですから、基本的に、この両国の間には、正式な国交の取り決めがなされていませんでした。
　ただ、ワイル島は活火山の影響で、自然環境がやや厳しく、島で生産できる食料は至って限られてしまうために、物資の豊富なイモガラ島から、一ヶ月に一回定期便の船が出ており、長い間、ワイル島とイモガラ島とを行き来できるのは、この輸送船のみとなっていました…。

　さて、以上のことをふまえたうえで、これから語られるお話の舞台は、イモガラ島北部の、内陸側に位置するキノコ町から始まります。
　この町の一番大きな通りで、道行く人の似顔絵を描いて暮らしている、とあるイノシシの青年。彼が、このお話の主人公であり、語り部です。
　彼の名前は、イノシチ。

## 第一章　ひそかな疑問

　イモガラ島北部、キノコ町のメイン・ストリート。ここが僕の、もうひとつの仕事場。
　僕はイノシチ。普段は町外れの居酒屋でバイトをしてるんだ。仕事のない時間や、休みの日には、路上で道行く人の似顔絵を描いて暮らしてる。休みの日でにぎわう時は、僕の周りにお客さんたちの小さな群れができるし、平日なんかは何時間もヒマを持て余すこともしょっちゅうだ。だから生活は、そこそこ。
　それでもお客さんの何人かは顔馴染みになって、よく遊びに来てくれるのが、ひそかに楽しみなんだ。

　ある日のこと。
　「イノシチさ〜ん！こんにちは」
　明るい声にふっと顔を上げると、そこには僕の常連、“お客さん第一号”の女の子が立っていた。名前はカリンちゃん。以前からひそかに僕の好みのタイプだ。
　「あっ、カリンちゃん！や、やあ、元気？」
　あわてて僕は笑顔で応対した、んだけど…よく見ると、彼女の隣にはいかにもチャラチャラした感じのイケメンが。え、まさか…と思っていると、
　「あ、まだ紹介してなかったわよね、こちらが私の彼氏よ。私たち最近付き合い始めたの」
　ガーン。
　「それでね、もしよかったら、ツーショットで一枚似顔絵描いてほしいんだけど」
　「…えっ、あ、ああ、はい…じゃあ、どうぞここへ座ってください」
　…トホホ。顔で笑って、心で泣いて。
　顔を描くために二人と向かい合っていると、カリンちゃんが笑いかけてきた。
　「うふふ、イノシチさんって、やっぱりすごく色白なんですね。お肌もツルツルしてるし、いいなぁ」
　「えっ、そうかな？」
　ちょっとだけ僕が気を良くし始めていたところへ、今度はイケメン彼氏が言った。
　「本当だ、君まるでイノシシじゃないみたいだよね！」
　イノシシジャ　ナイミタイ　ダヨネ　？
　僕がイノシシじゃないですと？？？

　その日の夜、ダブルにショックを受けた僕は、打ちひしがれながら風呂に入り、そのあと鏡の前に立った。
　自分では見慣れたつもりの、変わり映えしない顔だって思ってたんだけど…
　どこが一体変なのだろう？
　思えばこれが、僕が自分という存在に疑問を持ち始めたキッカケだったんだ。